寺町通の歴史

明治時代から現代

寺町通の変容はまだ続く。明治4年(1871)寺領上知令（寺院の所有する土地を取上げて官有地にする）が出され、寺町通の各寺院の土地が半分以下に縮小された。さらに明治5年(1872)には、京都府参事(後に京都府第二代知事)であった槇村正直が、東京遷都に伴う京都凋落の歯止めとして、寺町通と河原町通の間の三条通と四条通間に新京極通を開通させた。道の両側に映画館、芝居小屋、みやげ物屋等を多数作らせたので、新京極通は京都一番の繁華街になった。その陰では、多くの寺院の境内が縮小されたり、移転や廃止されたものもあった。

さらに太平洋戦争の終戦間際には、五条通拡幅のため、通りの南側の寺院が取り壊された。現在、鞍馬口通から五条通までの寺町通と五条通の南側にあって源融の旧河原院の故地で下寺町と呼ばれた地域にある寺院は約50ヶ寺であり、天正年間の寺院数の半分以下に減少している。

しかし、約400年の間に、戦火、大火、強制移転の困難に直面しながらも、町衆や寺院関係者は懸命に寺院を再建・維持してきた。天正年間にあった大きな寺院の姿は、現在見ることができないが、京都の人々の熱い思いが寺町通を守ってきた。まさしく京都の400年間の歴史を感じることができるのが、ここ寺町通といえよう。

平安時代から室町時代

寺町通は、都の一番東の通りで「東京極大路 （ひがしきょうごくおおじ）」と呼ばれ、北は一条通から南は九条通まで道幅約30mの大路だった。その後武士が支配する時代となり、多くの兵火、とりわけ応仁・文明の乱が応仁元年(1467)から約10年間続き、都は荒廃した。

安土桃山時代

荒れ果てた都を再興したのが豊臣秀吉である。秀吉は山崎の合戦(1582)に勝利し、すぐに京都の町の改造政策を実行した。その内容は、洛中の町割りの実施(一町四方の正方形の街区の中央に新たな道を通し、合理的な土地活用を志向)、御土居(鷹峯～紙屋川～七条～鴨川を囲む周囲約23ｋｍの城壁)の築造、内裏と公家町の再編を行った。その他、聚楽第(洛中のお城)と武家町の建設、伏見城、京の大仏(奈良の大仏より大きい)等を次々と建設した。

また秀吉は、洛中の寺院を現在の寺町通・寺之内通・七本松通沿いに集め寺町を造った。特に寺町通には、鴨川の西岸側に造られた御土居の内側に沿って、北は鞍馬口通から南は六条通に至る約5.5ｋｍの道沿いに、浄土宗・日蓮宗・時宗を中心に約100ヶ寺以上の寺院を集めた。

その結果、寺町通沿いに、線香・数珠・筆・墨・紙等を商う色々な店が建ち並ぶようになり、寺院のお参りや買い物目当ての客で賑わうようになった。

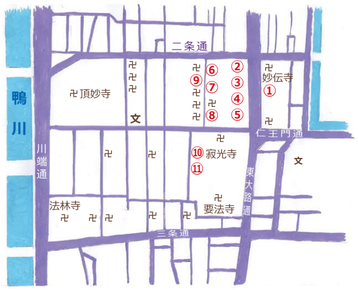
江戸時代

世の中が安定して洛中の名所・旧跡めぐりが行われるようになり、同時に寺院巡りが盛んになった。洛陽地蔵二十四ヶ寺廻、洛陽四十八願地蔵めぐり等がこれである。寺町通沿いには多くの寺院があり、これらの寺院を巡る上下寺町新四十八願まわり、上下寺町通三十六地蔵めぐり等が行われるようになった。

江戸時代には人口が増加し、幾度となく大火災が発生した。とりわけ宝永5年(1708)の大火では、内裏をはじめとして多くの町家・寺院が焼失した。大火後の内裏や公家町の再建に際して、内裏の南側の町家と内裏の東側の約30ヶ寺が、「東川原新地」(現在の二条通～川端通～三条通～東大路を囲む元新洞学区)やその他の地域に移転を余儀なくされた。現在この元新洞学区には、上下寺町通三十六地蔵めぐりの対象であった寺院が11ケ寺ある。実に、上下寺町通三十六地蔵めぐりの寺院の三分の一が、寺町通から消えたことになる。

天明8年(1788)にも大火が発生した。天明の大火といわれるもので、この火災では内裏のみならず、鞍馬口通から六条通までの寺町通の寺院の殆どが焼失した。加えて元治元年(1864)の禁門の変で、現在の中京区・下京区の多くの地域が焼失し、寺町通界わいの寺院も再び焼失した。これらの大火の際、ご本尊は何とか持ち出すことができても、持ち出す余裕がなくて焼失の憂き目にあった地蔵像があった。上下寺町通三十六地蔵めぐりの寺院にあった地蔵像もこうした運命を辿ったものが少なくなかった。

東川原新地(左京区元新洞学区)に移転した「上下寺町三十六地蔵めぐり」の寺院(11ヶ寺)



①聞名寺　②大恩寺　③西方寺　④教安寺　⑤信行寺
⑥仏光寺　⑦三福寺　⑧善香院　⑨西昌寺　⑩正行寺
⑪生蓮寺

京都の地蔵盆

地蔵盆とは

地蔵盆は地蔵菩薩の供養会である。地蔵菩薩は、冥土の三途の川の賽の河原で石を積んでいる幼子が地獄の鬼にいじめられているところを救い守ってくださると信じられ、京都では、この信仰にちなんで、毎年8月23・24日に子供を主役とする地蔵盆が行われる習わしである。この地蔵盆が京都の町に根づいたのは江戸時代とされる。各町内では、この日に向けて町内の集会所・路地などのオープンスペースに紅提灯や地口提灯を吊るし、お地蔵さまを清め目鼻立ちを綺麗に彩色してお祀りし、祭壇にお灯明を上げ、鏡餅・菓子・花を供えて地蔵盆の場をしつらえる。そして当日は、僧侶による読経・法話のほか、百万遍大数珠繰りなど昔ながらの伝統行事を行うほか、子供たちの祭としておやつ・福引・ゲームや様々なレクリエーション行事が行われる。

百万遍大数珠繰り(廻し)

元弘元年(1331)浄土宗本山知恩寺八世善阿空円上人は、後醍醐天皇の勅命により宮中で疫病退散の祈祷を行った。弟子たちとともに大数珠を繰り廻し、七日間の百万遍念仏を修めて疫病を払い、天皇からその大数珠に「利剣」の名号と「百万遍」の寺号を賜ったという。百万遍という名は今も地名として残る。百万遍念仏は大数珠を廻しながら念仏を唱える法会で、今も全国各地に残っている。とりわけ京都では、地蔵盆に欠かせない行事として大切にされてきた。大数珠繰りは、僧侶が読経する中、車座に座った大人や子供たちが直径数mもの大数珠を廻し、房のついた大珠が廻ってくると高く頭上にかかげ、「アン」という言葉を発することで知られる。普通の大数珠は珠も小型で珠数も108個であるが、知恩寺の大数珠は1080個の数珠からなり、全長110m、重さ320kg、一番大きな珠は直径15cmで中に仏像が入る。なお108とは、人間の煩悩の数を示すとされる。

畚降し(ふごおろし)

現代では本来の「畚降し」は見かけなくなったが、元は山から掘り出した鉱石を平地に運ぶため、ワラや竹で編んだ「畚(ふご)」という籠に入れ、上下を結ぶロープ伝いに降ろしていた。地蔵盆の「畚降し」は、民家の2階と地上をロープで結び、鉱石の畚降しと同様に、事前に子供たちに配った番号札と同じ番号が記された当り賞品を畚に乗せ、滑車を利用して2階から下に降してくる一種の福引のお遊びである。このとき世話役が独特の口上を述べるので、場が大きく盛り上がる。しかし子供たちが楽しみにしていた畚降しも、近年は、昔ながらの建屋構造の減少などにより、実施する町内は極めて少ない。

地蔵盆の風景

寺町通に近い中京区のある地域の地蔵盆の風景を見てみよう。この地域は、平安初期より公家の邸宅地帯であったこと、また江戸期には武家の京屋敷があったことなどを背景に、刀鍛冶、鞘・金具師や京染の着物生産に関わる商いなど様々な同業者町が形成され賑わいを見せてきた。そして近代でも著名人が居を構えていたこともあり、この歴史的背景をふまえて住民のわが町に寄せる思い、そして住民相互間の絆・町内安全を支える要としての「地蔵盆／お地蔵さま」に寄せる思いには格別なものがある。しかし近年は、少子高齢化・核家族化・市街地中心部の人口空洞化・マンション化の進行などによる住民構成の変化に伴い、「お地蔵さま」に寄せる住民意識も次第に変化、地域社会での住民間の横の絆を保つ役割を果たす「地蔵盆」も次第に姿を変えつつある。

さて意外なことに、地蔵盆に登場する地蔵は、路傍の地蔵堂に祀られている地蔵石仏は少なく、別に町内会がご先祖から大切に受け継いできた厨子入りの立派な地蔵であることが多い(木像が多いが掛軸上の画像や石像もある)。地蔵盆は、民家の玄関脇の部屋や車庫、あるいは路地入口付近の道路を占有し、中心に地蔵像を祀って設営される。飾り付けは、豪華なものから簡素なものまで様々であるが、大日如来との同時一体的な飾り付けが多い。過去帳を整え奉納して、子供たちとご先祖とのつながりを意識させるしつらえを工夫している町内もある。以前の地蔵盆は8月23・24日の両日に行われたが、今では直近の土・日曜日のいずれか1日のみにとどまる町内会が殆どである。行事内容も子供数の減少とともに縮小されてきた。しかし百万遍大数珠繰りだけは、今も伝統行事として守られてきており、多くの町内会で、僧侶の読経に合わせて子供たちの健康と地域の安全を祈願して、厳粛に営まれている。

«百万遍大数珠繰りをする子供たち(本文とは関係ありません)»

取材と編集:「京のお地蔵さんめぐり」プロジェクト

代表:吉見誠一郎
調査員:一井由清、井上千恵子、大田友紀子、大谷美美子、木村哲夫、熊谷喜輝、小西忠男、小松香織、坂本孝志、塩崎健吉、多賀靖治、田村光弘、橋本幸郎、広瀬俊子、福井大作、藤原明夫、山本喜康

表紙及びカット:山本喜康(都草会員)

お地蔵さんよもやま話

地蔵信仰とは

釈迦入滅後、弥勒が成仏するまでの無仏の時代、六道を輪廻する衆生、特に地獄に堕ちた衆生の救済を託された地蔵菩薩への信仰。地蔵菩薩本願経や地蔵十輪経などの経典がある。古代インドに起源を持つ神。サンスクリット語のクシチガルブハという名は大地の蔵するカを意味する。中国を経て奈良時代に伝来したが、盛んになるのは平安時代後期。浄土往生を望めない衆生の苦を引き受けて救済してくれる菩薩として期待を集めた。また地蔵は、衆生を救う菩薩であることから阿弥陀信仰と結びつき、末法思想の流行とともに信仰が盛んになった。中世以後、民間信仰化し、子供の守護神や境界神、身代り地蔵など多くの造像がなされて信仰が拡大していった。

よくあるお地蔵さんの異名

延命地蔵　鎌倉初期、日本で作られた仏説延命地蔵菩薩経は地蔵を、右手を耳たぶに寄せ、左手に錫杖を持ち、半跏踏み下げで蓮華座に座す形で表現。後に、右手に錫杖、左手に宝珠を持ち半跏踏み下げで蓮華座に座す像が延命地蔵と呼ばれた。今は像容にかかわらず、延命というご利益に着目して名付けられたものが少なくない。

子安地蔵　室町期を経て地蔵信仰が民衆の間に深まってくると、地蔵は、①柔和な僧形をしている、②小さな僧として現れることが多いという理由で、子供の守護神としての性格が出てきた。子安、子育て地蔵などと名付けられて多くの像が作られるようになった。「賽の河原地蔵和讃」は子供が主人公の物語である。

腹帯地蔵　仏説延命地蔵菩薩経は、それまであまり顧みられることのなかった女性のお産のご利益を取り上げて、「女人泰産」を第一の福に掲げた。そのため鎌倉期以降、腹帯地蔵という名の地蔵が作られるようになった。特徴としては、腹部に腹帯のようにみえる下衣を着けたものが多い。

㉓世継地蔵（上徳寺）

慶長8年(1603)徳川家康の帰依を得た伝誉上人が開山。家康の側室上徳院殿の菩提を弔うため建立された。境内の二間四方ある地蔵堂には、高さ２ｍ余の石造地蔵が祀られている。名を世継地蔵という。江戸初期、跡継ぎの誕生を祈って日参した女性が七日目に地蔵からお告げを受け、地蔵を造って奉納するとたちまち懐妊したという。今も子授けを願ってお参りに来る女性が多い。毎年2月8日には、世継地蔵尊大祭が盛大に行われる。

下京区富小路通五条下ル
本塩竈町556
☎075-351-4360
拝観 7時～17時

㉔延命地蔵（新善光寺）

来迎堂と号する。天仁2年(1109)堀川松原の地に伽藍が建立された。その後幾多の兵火に遭い寺地も転々としたが、天正19年(1591)現在地に移る。本尊の阿弥陀如来像は、信州善光寺の阿弥陀如来の分身と伝え、寺名もそれに由来する。境内にある五角形の地蔵堂に祀られている地蔵は高さ154cmの木像であるが、由来は不明。江戸期には、上下寺町三十六地蔵めぐりの第三十五番、洛陽四十八願地蔵めぐりの第四十七番札所として賑わった。

下京区富小路通五条下ル
本塩竈町553
☎075-351-8160
拝観 9時～17時

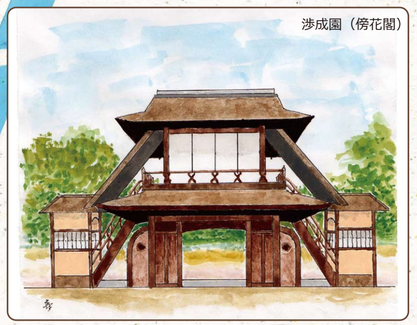
㉕駒止地蔵（蓮光寺）

室町後期に天台宗真盛派の開祖真盛上人の弟子蓮光が建立。負別阿弥陀と呼ぶ本尊阿弥陀如来像は快慶作という。地蔵堂に祀られている地蔵は石造で高さ約2.7m、弘法大師作と伝わる。平清盛の乗った馬が動かなくなり、その場を掘るとこの地蔵が出てきたことから、駒止地蔵といわれる。江戸期には名地蔵の一つとして、また洛陽四十八願地蔵めぐりの第四十五番札所としても賑わった。霊元法皇御製のご詠歌と伝わる「駒止めし仏はいつか駒の身と化しても救ふ誓いありとぞ」がある。

下京区富小路通五条下ル
本塩竈町534
☎075-351-3066
拝観10時～16時
（地蔵堂内は要許可）

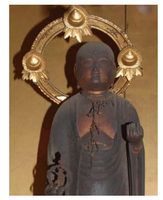
寺町通界わい地蔵めぐり
その3（下京区）

涉成園（傍花閣）



⑮醒ケ井地蔵（妙心寺）

銅葺き唐破風造りの地蔵堂に安置されている地蔵は、木造の立像で高さ36㎝。丸味を帯びたふくよかな容貌をしており、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ。壬生寺の縄目地蔵と同じ木で定朝が造ったものと伝える。名の由来は、初め四条醒ケ井に祀られていたことによる。江戸期には洛陽四十八願所地蔵めぐりの第三十一番札所として賑わった。霊元法皇御製のご詠歌と伝わる「長き夜の夢醒ケ井の水掬び人は妙なる心覚らん」がある。



中京区裏寺町通蛸薬師上ル
裏寺町592
☎075-221-1650
拝観:不可

⑯夜叉身弟児地蔵（常楽寺）

本堂に祀られた地蔵は木造で高さ50㎝、蓮華座の上に立つ。鮮やかに彩られた七条袈裟をまとい、右手に錫杖、左手に童子を抱き、その童子が宝珠を捧げ持つ。穏やかな容貌で童子を抱く姿は、永遠の母性を感じさせる。江戸期には洛陽四十八願所地蔵めぐりの第三十二番札所として賑わった。霊元法皇御製のご詠歌と伝わる「咲けば散るかみがたなれど撫子の華の弟児を守る御仏」がある。

中京区裏寺町通蛸薬師下ル
裏寺町598
☎075-241-0057
拝観 9時～16時(要許可)

⑰染殿地蔵（染殿地蔵院）

文徳天皇后藤原明子が、地蔵に願をかけて後の清和天皇を生んだ故事により、安産信仰が広まった。また、夢窓国師が西芳寺の庭園造りに難儀した際、この地蔵が手伝ったので立派な庭園ができたという。木造裸形の立像で、高さ約2m。秘仏であるが、50年に1度、衲衣を改める際に開帳される。江戸期には洛陽四十八願地蔵めぐりの第三十六番札所として賑わった。霊元法皇御製のご詠歌と伝わる「古へもいま後の世も限りなく救ふ心は深き染殿」がある。

中京区新京極通四条上ル
中之町562
☎075-221-3648
拝観境内自由

⑱安産背競地蔵（透玄寺）

あかかべ寺ともいう。室町幕府第九代将軍足利義尚の弟義兼の嬪子・僧覧公が創建。門前に弘化２年(1845)の銘がある地蔵の案内石碑がある。当寺に残る「安産背競地蔵尊縁起」によると、難産の末生まれた恵心僧都が女性の安産を祈願して、この地蔵を彫ったという。幾多の戦乱の後、当寺の十六世上人が当寺に祀った。地蔵は、木造彩色の立像で高さ約70㎝、庫裏に付属した地蔵堂に安置されている。江戸期には上下寺町三十六地蔵めぐりの第三十一番札所。

下京区寺町通綾小路下ル
中之町585-1
☎075-361-1653
拝観 9時～16時半
(閉門時には声をかけること)

⑲開運地蔵（聖光寺）

仏師康慶(運慶の父)の邸宅跡に、建久8年(1197)浄土宗二世聖光上人が開創。天正11年(1583)僧良阿が中興。本尊は阿弥陀如来立像。寺内墓地には、大石内蔵助の母、天野屋利兵衛、鞍馬天狗で有名な俳優の嵐寛寿郎らの墓がある。境内の片隅に約一間四方の地蔵堂があり、その中に木造等身大の地蔵が祀られている。地蔵の由来は不明であるが、昔より開運地蔵尊として有名。江戸期には(阿弥陀如来)四十八願寺めぐり第四十二願として賑わった。

下京区寺町通綾小路下ル
中之町584-1
☎075-351-7584
拝観は開門時のみ

⑳開運地蔵（空也寺）

平安中期に社会救済活動を行った空也上人が天禄3年(972)に創建。再建・移転を繰返したが平成12年2月、新しい本堂が落慶した。堂内の脇壇に、鉄製の鎌倉期作と伝わる釈迦坐像と、木造立像で高さ79cmの地蔵が祀られている。この地蔵は、昔から発作痙攣症に霊験があるという。境内には、石造りの地蔵と布袋像がある。七五三に詣でた子どもが、布袋像の穴をくぐると元気に育つという。江戸期には(阿弥陀如来)四十八願寺めぐりの第四十一願として賑わった。

下京区寺町通仏光寺下ル
恵美須之町539
☎075-351-1857
拝観:開門時のみ。堂内は要予約

㉑うかがい地蔵（勝圓寺）

永正元年(1504)僧安誉が建立。天正年間に現在地に移る。浄土宗。本尊は阿弥陀如来。後奈良天皇(1496～1557)の帰依で「勝圓寺」の勅額を賜る。地蔵は高さ約30㎝の石造で、願いごとが叶うかどうか、祈りながらこの地蔵を抱き上げて、重さの感覚でうかがうので、「うかがい地蔵」の名が付いた。殊に太平洋戦争終戦後、出征した兵士が無事に帰国してこられるかどうかをうかがうために、多くの遺族が訪れた。

下京区佛光寺通河原町
西入富永町343
☎075-351-7855
拝観は要事前連絡

㉒泥付地蔵（本覚寺）

貞応元年(1222)源実朝夫人が尼となり、本覚と号して一宇を建立。幾多の兵火で再建・移転を繰り返したが、豊臣秀吉の命で現在地に移る。本堂内の地蔵は高さ30㎝の木造立像で名を泥付地蔵というが、由来は不明。江戸期には、土筆地蔵という名で京都に二十一あった名地蔵の一つに数えられた。また洛陽四十八願地蔵めぐりの第四十八番札所として賑わった。霊元法皇御製のご詠歌と伝わる「四十あまり八つの姿に巡りあひて御法の海の深きをぞ知る」がある。

下京区富小路通五条下ル
本塩竈町558
☎075-351-4780
拝観 9時～16時
(本堂内の地蔵は非公開)

江戸期の地蔵めぐり

六地蔵めぐり

小野篁が冥土に行って生身の地蔵を拝し、のち蘇生して一木で六体の地蔵を彫り出して大善寺に祀ったことに始まるという。保元年間、平清盛が西光法師に命じて京都の七道の辻に石の地蔵を造らせて祀ったという(『源平盛衰記』)。のち六地蔵となり、地蔵信仰の高まりとともに、この六地蔵を巡拝する風習が生まれ、毎年多数の男女が巡拝するようになった。

六地蔵めぐりの原型は、江戸期の寛文年間(1661～73)にほぼ定まったとされる。伏見六地蔵の大善寺(奈良街道)、上鳥羽の浄禅寺(大坂街道)、桂の地蔵寺(山陰街道)、常盤の源光寺(周山街道)、深泥池(鞍馬街道)、山科四ノ宮の徳林庵(東海道)がこれである。このうち、深泥池の地蔵は明治になって鞍馬口の上善寺に移された。

8月22日・23日の両日、第一番の大善寺から時計回りに巡拝し、家内安全・無病息災・商売繁盛・五穀豊穣などを祈願する。そして、寺ごとに色の異なる地蔵のお幡の授与を受け、そのお幡を自宅玄関に吊るすと、厄病退散・福徳招来などのご利益があるという。

上下寺町三十六地蔵めぐり

宝永の大火(1708)後の正徳五年(1715)に刊行された『都すずめ案内者』には、他の地誌にはあまり触れられていない錯社寺めぐりの記事が目立つ。地蔵めぐりに限っても六地蔵めぐりをはじめ、洛陽地蔵二十四ヶ寺廻、上下寺町三十六地蔵めぐりがある。

これらのうち、上下寺町三十六地蔵めぐりは、寺町通にあって霊験あらたかな地蔵を祀る寺院を北から南へと巡拝するもので、第一番の上善寺から第三十六番の本覚寺までの三十六ヶ寺の所在地を記している。第九番の三福寺から第二十番の聞名寺までの十一ヶ寺(第十九番の福勝寺を除く)は宝永の大火で類焼し、今の左京区元新洞学区(当時は東川原新地といった)に移った。

その後天明8年(1788)の大火や元治元年(1864)の禁門の変などにより、これら巡拝寺院の地蔵堂の多くが焼失し、地蔵も失われてしまった。

洛陽四十八願地蔵めぐり

仏教に篤く帰依していた江戸中期の霊元法皇(後水尾天皇の皇子、第112代の天皇)は、あるとき、洛中で霊験あらたかな地蔵を求めさせたところ、四十八ヶ所の地蔵が見つかった。延命地蔵菩薩経は、地蔵が四十八の姿に変えて衆生を救う誓願をたてていると説く。そこで法皇は、四十八ヶ所の巡礼を行って、諸人に地蔵の霊験があらたかなることを知らせたいと思い、自らご詠歌を作られたと伝わる。このとき、内々に勅を受けた公卿の一人が宝山と名を変えて念仏の行者となり、ご詠歌と霊場の道しるべを記して、長らく法皇の代参を務めた。天明8年(1788)の火災により、多くの霊場が類焼したため、地蔵めぐりが絶えようとしたが、宝山の手引書が遺されていたため寛政2年(1790)になって、地蔵めぐりが復活したという。

しかし復活した地蔵めぐりも、元治元年(1864)の禁門の変で関係寺院が類焼したり、明治元年(1868)の神仏分離令の余波を受けて、仏教界が沈滞したため、自然に途絶えてしまった。大正4年(1915)、関係者の手により地蔵めぐりの再々興が企てられたが、地蔵信仰に対する世間の関心が薄れていたこともあって、地蔵めぐりの再興は叶わなかった。